# 金澤史男先生の業績と足跡

上川孝夫（横浜国立大学教授）

ただいまご紹介にあずかりました本学の上川でございます．金澤史男先生とは経済学部の同僚として20年来の付き合いでございました．先生の突然の訃報に接した時，私は強い衝撃を受けました．かけがえのない友人，同僚を失ったという思いでした．本日は，かつての同僚の一人として，金澤先生の業績と足跡を振り返り，哀悼の念を表したいと思います．

お手元に『故金澤史男教授－年譜・主要業績－』を用意させていただきました．一枚めくっていただきますと「年譜」がございます．先生は1953年にお生まれになり，東京大学の経済学部，大学院，助手などを経て，1985年4月に静岡大学，1990年4月に本学経済学部の「地方財政」担当の助教授として赴任されました．私はその半年前に赴任しておりました．

本学に赴任して以来の先生のご活躍は，誠に目を見張るものがありました．大学運営では2002年4月から経済学部長，2005年4月から大学院国際社会科学研究科長を務められ，亡くなられた時点では本学の評議員であり，また地域実践教育研究センター長を併任されておられました．

先生は数々の重要な仕事をなされましたが，ここでは二つだけお話をしたいと思います．

一つは，大学院の博士課程の創設に情熱を傾けられ，他部局の協力のもとに，これを実現したことです．先生が本学に赴任された時は社会科学系の博士課程は存在せず，博士課程をつくることは社会科学系部局の悲願でありました．博士課程は1996年4月に国際開発研究科として実を結び，1999年4月にはこれを発展させて国際社会科学研究科の創設となりました．本学赴任当初，先生は，「ドクター課程をつくりたい，若手研究者を育てたい」というのが口癖でありました．忙しく学内を駆け回っていた頃の先生の姿が懐かしく思い出されます．

もう一つは，国立大学の法人化にかかわる仕事でした．国立大学の法人化は2003年4月にスタートしましたが，当時，先生は経済学部長の要職にありました．法人化に向けておびただしい数の全学会議が開かれ，文字どおり会議，会議の連続でありました．私もしばしば同席しましたが，先生は，法人化後の望ましい大学運営を願って，あらゆる重要な問題にかんして発言をされましたが，その毅然として悠揚迫らぬ態度は，今もって脳裏に浮かびます．

他方で，先生は，決して大学という枠に閉じこもることなく，積極的に学外で多くの仕事に取り組まれました．年譜には書いてありませんが，国や自治体の審議会，委員会など数多くの仕事につかれ，神奈川県では水源環境税にかかわりました．学会では，日本財政学会，日本地方財政学会それぞれの理事，常任理事を歴任され，学会の発展に尽くされました．

また，中国の大学など，国際的な学術交流に務められました．本学でも，逝去されるまで地域実践教育研究センター長として，神奈川や横浜の地域再生・都市再生に関するプログラムの運営，都市再生モデルの構築などに取り組んでおられました．

さらに，先生は，大学の教育を非常に重視しておられました．先生の学部のゼミは，いわゆる「人気ゼミ」であり，毎年のように多数の応募がございました．さる6月16日，先生が倒れられたのは，経済学部の「地方財政」の講義の終了直後でございましたが，今考えてみますと，先生はあらん限りの力を振りしぼって最後

のメッセージを学生に残されて旅立たれたのだと思えてなりません．

さて，先生は数多くの研究業績を残されました．年譜の次のページから「主要業績」が載っております．

先生の学問については，私は専門が異なりますので，のちほど専門の先生方から話があるかと思います．私は金澤先生が残されたメモ，あるいはご自身の研究について話された記録などをもとにして，以下三つに分けて先生の業績を簡潔に紹介させていただきたいと思います．

第一は日本の地方財政，政府間財政関係の形成史にかんする研究です．わが国では，国から地方へ，補助金，地方交付税，財政投融資などを通じた財源再配分の仕組みがございますが，こうした現代財政の形成過程に関する研究を進められました．ページをもう一枚めくっていただきますと「４．論文（雑誌等所収）」がございます．先生の話によりますと，先生が大学院生だった 1979 年頃に都市財政と農村財政にかんする研究を同時に始められたとのことです．最初に掲載されている論文は都市財政に関するものですが，農村については五加村農村調査に参加し，のちにその成果が本に収められます．続いて 1920 年代の両税移譲論，地方分権の研究に取り組まれ，さらに財政投融資の前身である預金部，簡保資金，そして補助金などといった，戦間期にかんする研究が続きます．

先生は，こうした現代財政の形成過程について，さらに国際比較の視点も取り入れて議論を精緻化する一方，財政史，地方財政史研究の方法論にかんする論稿なども残されました．

第二は現代の日本財政や地方財政をめぐる諸問題の研究です．先生が本格的に現状分析の研究を開始したのは，1980 年代から 1990 年代にかけてのことだと回顧されております．先ほどの「４．論文（雑誌等所収）」の続きを追っていきますと，1980 年代後半の静岡大学の時期には，テクノポリス，消費税，地域政策などに関する論稿がございます．続いて 1990 年代以降，本学に赴任してからは，地方分権，財政危機，三位一体改革，地方新税等々にかんするテーマが続いております．

当時，先生は，先ほど述べましたように学内外で多忙な日々を送っておられましたが，それと並行して多くの論稿を執筆されていたことが分かります．しかし先生によれば，こうした仕事も，先ほどの歴史研究の意義を捉え直す契機になったようです．形成された日本型財政システムが，その後どのように変容していくか．その再編の歴史的意義を検討することが先生の課題でした．

第三は以上のような研究にもかかわりますが，先生は福祉国家論，福祉国家財政論，新自由主義，公共性をめぐる問題，日本資本主義論といった，より大きな問題についても精力的に研究を進められていました．ここ数年，抜刷などをいただきましたが，読んでいて先生はいよいよ自らの研究の集大成に向かっているのではないかとも感じられました．

私が先生に最後にお会いしたのは亡くなる３日前，出版社と「日本経済」全 10 巻の出版企画についての打ち合わせを行った時でした．先生は様々なアイデアを提案されましたが，先生の長年にわたる研究成果を凝縮した企画にもなるのではないかと思っておりましたので，誠に残念でなりません．しかし，本日お手元に先生の遺稿集の刊行にかんする案内が入っております．先生の遺稿集刊行の実現に向けて，私も大いに協力させていただきたいと考えております．

さて，先生は以上のような研究を進めるかたわら，都市史の研究や，地方誌の編纂にも携わっておられました．主要業績の最後のページに「５．地方史編集・執筆」がありますが，ここに先生の業績が掲載されております．

さらに，先生の研究業績で逸することができないのが，先生の門下生たちとの共同研究です．元に戻って恐縮ですが，主要業績の「１．単編著」に，先生が単独に編者として出された本がございます．１番上の『現代の公共事業』，３番目の『公私分担と公共政策』です．これらは先生の

門下生を中心に他大学の先生などが加わってできた，文字通りの集団労作です．最初の本『現代の公共事業』の「あとがき」で，先生は，次のように記しております．「私が本書に込めた一つの思いは，若手研究者との共同研究をめざしたことである．」ドクター創設に情熱を傾けた先生にとって，まさに教師冥利に尽きる，との思いだったに違いありません．

先生はまた，学生や市民の方が学べるテキストの作成にも努力を払いました．同じく「１．単編著」の２番目にあります『財政学』という本がそれです．多くの大学で利用されていたと聞きます．またその下の「２．共編著・共著」の4番目にありますが，『現代の経済政策』というテキストがございます．これは発行部数２万部を超えるロングセラーとなりました．

金澤先生は，このように教育，研究，学内外での仕事など，すべてにわたって遺憾なく能力を発揮されました．誠に大きな存在でございました．先生が忽然と逝去されてから３カ月余り，身辺まさに寂寞たる思いを禁じ得ません．

先生は，先ほどのテキスト『財政学』の「はしがき」の中で，様々な財政問題の行く末を選択するのは「主権者である国民」であり，「そのことを実質化していく努力を続けなければならない」，「財政学栄えて，財政滅ぶ」といった事態になってはならない，と述べておられます．

大学の教育に携わる一人として，今はただ，特に若い世代の方々が先生の書かれたものを振り返り，未来社会を切り開いていく際の参考にしていただくことを願うばかりです．

誠に簡単措辞ではございますが，以上をもちまして私の話とさせていただきます．どうもありがとうございました．